

紫雲出山遺跡は、瀬戸内海の広域交流で重要な役割を担った弥生時代の集落として、史跡に指定されることになった。紫雲出山遺跡が発見されたのは戦後間もない1949年。その契機となったのは、紫雲出山を観光地にしようとする動きだった。

1. 紫雲出山と紫雲出山遺跡
2. 近世から近代にかけての紫雲出山
3. 戦後の香川県の観光地選定
4. 荘内村の観光計画
5. 紫雲出山遺跡の発見
6. 紫雲出山の観光地化

1. 紫雲出山と紫雲出山遺跡

- ・紫雲出山は、香川県三豊市の荘内半島にある山。標高 352m。瀬戸内海を一望できる眺望や春の桜、初夏の紫陽花などで有名。
- ・山頂には弥生時代の紫雲出山遺跡がある。紫雲出山遺跡は 1950 年代などに調査され、近年、三豊市教育委員会によって改めて調査が行なわれた。
- ・その結果、山頂ほぼ全域への遺構、遺物の広がり、高さのある建物の一部と推測される柱穴などが確認された。また、他地域産の弥生土器も出土した。
- ・こうした調査成果から、紫雲出山遺跡は瀬戸内海の交流にかかわる遺跡と評価され、史跡に指定されることとなった。

2. 近世から近代にかけての紫雲出山

- ・丸亀藩が編さんした地誌「西讃府誌」(1858 年・安政 5)には、積浦や大浜浦にある山として掲載されている。
- ・香川県内の名所や観光地が描かれた「史跡と風光の香川県」(1931 年・昭和 6)に紫雲出山は登場しない。
- ・昭和初期以前、紫雲出山は特別視される山ではなかった。

3. 戦後における香川県の観光地選定

- ・戦後、1946年(昭和21)時点で府県レベルの観光機関が30を超える。観光への早い動き。
- ・香川県では1948年に県内各地で46の観光地区を選定した。香川県はその後選定作業を継続し、1953年の国体開催に合わせて100地区をリストアップした。紫雲出山は1951年の「香川県観光地百景一覧表」に初めて登場する。

4. 荘内村の観光計画

- ・荘内村は1890年(明治23)に成立した自治体で、荘内半島の中部から北西部を占めていた。紫雲出山は荘内村に属する。1955年(昭和30)、詫間町、荘内村、粟島村が合併して詫間町となった。
- ・1948年、三豊郡北部観光連盟(詫間町・仁尾町・荘内村・粟島村)発足。
- ・1948年からの浦島観光準備委員会を経て、1950年、浦島観光協会(荘内村)発足。
- ・荘内村は、浦島太郎伝説と紫雲出山を軸として観光計画を策定した。
- ・明治期から荘内半島と浦島太郎伝説を結びつける言説が存在し、1951年、地元在住の三倉重太郎氏が浦島太郎伝説をまとめた。

5. 紫雲出山遺跡の発見

- ・1949年(昭和24)、登山道設置に伴い、地元在住の前田雄三によって弥生土器と石斧が発見された。さらに、1950～52年には、回遊道路整備などに際して、山頂の広い範囲に弥生土器が散布することが確認された。
- ・紫雲出山遺跡発見の契機となった山頂付近整備の背景にあるのは荘内村の観光計画。
- ・1955～1957年、京都大学の協力を得た発掘調査が行われ、1964年にはその成果をまとめた報告書『紫雲出』が刊行された。

6. 紫雲出山の観光地化

- ・1952～1955年(昭和27～30)に桜の植樹開始。荘内村の観光計画に基づく。
- ・荘内村の観光計画は、1955年に発足した新制詫間町に引き継がれた。
- ・1960年代には、紫雲出山山頂への自動車道や、山頂の展望台などが整備された。また、1970年代には桜の名所として知られるようになった。
- ・紫雲出山遺跡も、学術的評価を伴って観光資源としての期待を背負った。